

バスケットボール競技における攻撃回数が勝敗に及ぼす影響の研究

A study of impact of frequency of offense on the outcome of basketball games

1K04B035-4

大西 真由

指導教員

主査 土屋純先生

副査 倉石平先生

緒言・目的

バスケットボール競技は、1891年にアメリカ合衆国マサチューセッツ州スプリングフィールドのYMCAトレーニングセンターにおいて、ジェームス・ネイスミス博士によって創案された。ネイスミス博士は、冬の厳しい寒さの中、体育館において行なえる楽しいスポーツはないかと試行錯誤を繰り返した結果創案されたとしている。日本に伝達されてから100年以上が経過した。本学女子バスケットボール部も50年の歴史を持ち、日々、勝利するために努力を重ねている。今研究は、より競技力を向上させる一助として攻撃回数に着目した。勝利するためには、攻撃回数がどのように影響しているかを今研究で明らかにしたい。

方法

2007年9月1日～10月21日に行われた第57回関東女子学生バスケットボールリーグ戦1部(全8チーム)、各チーム14試合の計56試合を分析対象とした。(9月1日に行われた筑波大学対専修大学の1試合のみ、データ不足につき攻撃回数を除外した。)

本研究では、以下の4項目を分析対象とする。

- ① 攻撃回数と勝敗の関係
- ② 攻撃回数(オフェンスリバウンドを除く)と勝敗の関係
- ③ 得失点の差異と勝敗の関係
- ④ フリースロー試投数と勝敗の関係

結果・考察

- ① 攻撃回数と勝敗の関係

上位のチームは、自らのペースを守れたため、勝率が高かった。平均の攻撃回数もゲームプランとして反映されていると考える。勝率の低いチームは、ゲームプランを全うすることができなかった。したがって攻撃回数が、狙いとは変化したと思われる。

- ② 攻撃回数(オフェンスリバウンドを除く)と勝敗の関係

上位チームに大きな選手がいたため、リバウンドを除いたとき大きな差異が出たチームがあった。下位のチームでは、リバウンドを奪取できなかったことがはっきりしており、その差異は少なかった。

- ③ 得失点と勝敗の関係

勝率が高いチーム程得失点差異がプラスに大きく働く傾向にある。勝率が低いチーム程マイナスに大きく働く傾向にある。今回の結果では、勝率の高いチーム程大きくプラスに働いていた。逆に、勝率が低くとも勝利する時が大勝で、敗戦時が僅差となると、勝率は低くともプラスに働く場合もある。しかし今リーグ

戦ではこのイレギュラーな成果はなかった。当初考えていた通りの結果が出た。

- ④ フリースロー試投数と勝敗の関係

上位のチーム程フリースロー試投回数が多かった。しかし本学は、ゲームプランをうまく表現できたため、フリースロー試投回数では、リーグ中2位であった。下位のチームは、フリースローをプランとして立案していなかったように思われた。

まとめ

大学リーグ戦においては、攻撃回数が多いチーム程勝率が高いという結果が出た。この内訳には、多くのオフェンスリバウンドを奪取することで回数を増す傾向にあることもわかった。今リーグでは、身体的な問題が大きくクローズアップされたともいえる。本学に関しては、4つの項目の分析結果からもわかるように、コーチの立てたゲームプランがはっきりと表現されていた。フリースローもリーグ2位の成果、そして得失点差異においてもプラスになっていた。リバウンド奪取での回数の増減に関しても、あまり顕著な差異も出なかった。しっかりと自らのペースを守っていたと言える。

大学リーグ戦のレベルでは、コーチによる戦術戦略でうまくコントロールしていたと言える数値は顕著には出てこなかった。勝率が高いチーム程、理想に近い数値をはじき出していた。しかしこれが狙い通りであったかは、今分析では実証することは難しかった。今データを継続して収集、分析することで、これらの項目はしっかりと実証することができる。そしてその結果が、勝敗に大きく影響すると思われる。

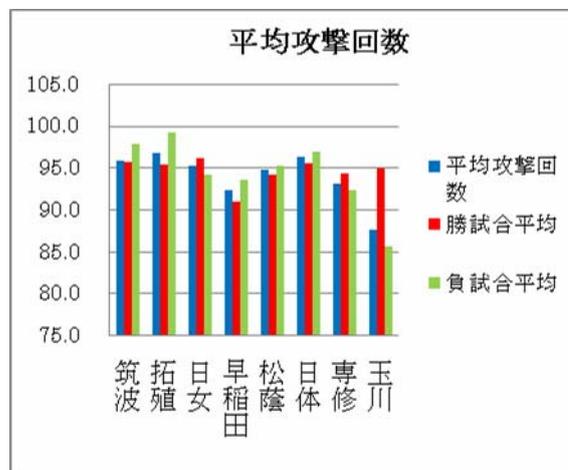


図1 各チームの平均攻撃回数と勝敗別の平均攻撃回数